Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

P98

子どもが全盲者とぶつかった際の親の対応について

－障害理解の視点から－

○望月　珠美　　徳田　克己
（筑波大学）（筑波大学）

はじめに

青柳・徳田(1998)は、視覚障害者が道路等を歩いている時に幼児や母親との間に生じたかかわりについて調査を行った。その結果、視覚障害者が不快に感じる対応のひとつに、目が見えないことや白杖に幼児が強い興味や関心を示すことに対して、母親をはじめとする周囲の大人がそれをたしなめたり無視したりすることがある点を挙げている。

障害理解教育では、幼児が自分と他者との違いや障害者の存在に気づくことを障害理解の第１段階としている。そしてこの時期に大人が幼児の障害に対する興味や関心を無視したり叱責したりすることが、のちの障害観の形成に負の影響を与える危険があることを指摘している（徳田,1995;1998等）。

本研究では、幼児を持つ保護者を対象にした調査を通して、子どもが路上で視覚障害者とぶつかったことを想定した際に、保護者は視覚障害者および子どもに対してどのように対応するのかについて確認したいと考えた。またその結果を障害理解の観点から考察し、今後、保護者を対象にした障害理解教育を進める上での資料にする予定である。

方法

1．調査対象地域：茨城県Ｋ郡Ｔ町
2．調査対象者：調査地域内にある私立Ｔ幼稚園に在籍する園児の保護者98名を対象にした。
3．調査方法：無記名による集団質問紙調査を行った。具体的には、私立Ｔ幼稚園が年間行事として園児の保護者を対象に行っている講演会に本研究の共同研究者が講演者として来園した際に、講演会に参加した保護者に対して調査への協力を依頼した。記入が済んだ回答用紙は、講演会終了後に一斉回収された。
4．調査実施日：平成10年５月
5．回収標本数：98標本（回収率100%）
6．調査項目：調査対象者は下記の問いを読んだ後、ふたつの設問に回答した。回答はすべて自由記述とした。

《問い》　あなたのお子さん（幼稚園児）が道を歩いている時、前から白い杖をついた目の不自由な人が点字ブロック（黄色いボツボツ）の上を急ぎ足で歩いてきて、たまたま点字ブロックの上にいたお子さんにぶつかってしまい、お子さんが倒れて泣いてしまったとします。その時あなたは、目が不自由な人に何と言うと思いますか。またお子さんにはどのように説明しますか。思いついたままをご自由にお書き下さい。

①目の不自由な人に対して何と言いますか。
②お子さんにはどのように説明しますか。

結果および考察

回答用紙を集計・整理した結果、分析の対象として97標本を採用した。

①視覚障害者に対して何と言うか

表１に、視覚障害者への対応を示した。表中の百分率は母数を97名としており、各対応に関する記述をした者が全体に占める割合を示している。

視覚障害者への対応として、延べ 162件の回答が得られた。この回答を対応の仕方によって整理した結果、６種類に分類された。

対応として最も多くみられたのは「謝る」であり、84.5% であった。以下、「(けがの有無を確認する等)相手を気づかう」(50.5%)、「相手に状況を説明する」(23.7%)、「手引きを申し出る等の好意的な言動」(4.1%)、「ゆっくり歩くように依頼する」(3.1%)「何も言わない」(1.0%) 等の回答が挙げられた。なお上位２項目を占めた「謝る」「（けがの有無を確認する等）相手を気づかう」対応は、ぶつかった相手の障害の有無にかかわらず、公共の道路を利用する者が心がけておくべきマナーと言える。

一方「相手に状況を説明する」といった対応は、瞬時に周囲の状況を判断することが困難な視覚障害者にとって、有効かつ適切なものである。以下にその具体的回答の例を示す。

＊「（謝罪した上で）うちの子が点字ブロックの上で遊んでいてぶつかってしまいました」
＊「子どもがころびましたが、無事ですから心配しないで下さい」
＊「子どもが泣いていますが、もう大丈夫です」

また「手引きを申し出る等の好意的な言動」は、保護者の障害者に対する受容的な態度のあらわれであり、視覚障害者にとって有益なものであるだけでなく、障害理解の観点からも、その場にいる幼児に望ましい影響を及ぼすことが推察される。具体的には、以下に示すような回答が得られた。

＊「お近くまでご一緒しましょうか？」

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

＊「どうぞお気をつけて」

「ゆっくり歩くように依頼する」との対応は、視覚障害者自身にも公共の道路を利用する者の一員として周囲に対する配慮が求められることを示すものである。障害者と健常者の双方が快適に道路を共有するためには、健常者が障害者に対して一方的に謝ったり配慮するのではなく、必要があれば意見や要望を伝えていくことが必要である。このような認識を広めていくことは、今後の障害理解教育の課題のひとつと言えよう。

さらに気になる対応として、「何も言わない」ことが挙げられる。このような対応は、言語によるコミュニケーションを主要な情報源としている視覚障害者に戸惑いを与えるものであり、不適切な対応であると言える。上述したような不適切な対応が生じる背景には、健常者の側に障害に関する基本的な知識が欠如していることがうかがえることから、視覚障害の特性や障害者と接する際のエチケットについて知る機会を意図的に設けることによって、障害に関する知識を深めていく必要があると言える。逆に言えば、障害に関する知識を深める機会がなければ、障害者に対する不適切な対応を減少させることはできないのである。

②子どもへの対応

子どもへの対応としては、延べ 162件の回答が得られた。この回答を障害に関する記述の有無によって分類したところ、88.7% に障害に関する何らかの記述が認められた。

幼児教育においては、障害者や障害がある友だちについてどのように教えていくべきかということについて、幼児の障害観は成長とともに自然に形成されていくものであり、意図的な介入は必要ないとの意見が依然として聞かれるが、今回の結果は多くの保護者が、機会があれば子どもに障害や障害者について積極的に教えていきたいと考えていることを示唆するものと言える。

続いて、すべての回答をその内容によって細かく分類したところ、表２に示したような結果が得られた。割合の母数は97名であり、表中の百分率はそれぞれの対応を記した者が全体に占める割合を示している。

子どもへの対応には多様なものがあるが、それぞれの対応を障害理解の観点から検討した概要を述べる。

まず、単に「注意しようね」「気をつけようね」といった抽象的な言葉がけでは、幼児は次にどのように行動したら良いのかがわからない。そこで、「点字ブロックの上は歩かない」「白い杖を持った人が来たら道を譲る」等の具体的な対処の方法を伝えることが必要である。また子どもを叱って萎縮させたり、視覚障害者に無理に謝らせる等して、障害者との接触体験を「いやな怖い体験」として印象づけることは絶対に避けなければならない。そのためには、保護者が点字ブロックや白杖の役割を話す等、子どもなりに納得することができるように働きかけたり、子どもを気づかい励ます姿勢が必要であると言える。

最後に、幼児の障害についての気づきについて述べる。幼児が障害や他者との差異に気づき、それに関心を示すことは成長の過程において当然のことである。保護者には、幼児の気づきを無視したり遮ることでそこにマイナスのイメージを持たせることがないような配慮が求められる。それは障害者の前であっても同じである。障害者を前にして子どもから何か尋ねられた際の「あとでね！」「そんなことを言ったら失礼でしょう」といった保護者の対応が、幼児の障害者や障害に対するファミリアリティ（親しみ）の向上の機会を奪っていること、また視覚障害者の多くがそのような対応に疎外感と不快感を感じていることを障害理解教育を通して伝えていくことが必要である。

表１．視覚障害者への対応

・謝る	84.5%
・（けがの有無等）相手を気づかう	50.5%
・相手に状況を説明する	23.7%
・手引きを申し出る等の好意的な言動	4.1%
・ゆっくり歩くように依頼する	3.1%
・何も言わない	1.0%

表２．子どもへの対応

・点字ブロックの意味について話す	54.6%
・注意する／気をつけるように言う	24.7%
・視覚障害について話す	23.7%
・子どもを気づかう／励ます	17.5%
・点字ブロックの上は歩いてはいけないことを話す	16.5%
・視覚障害者には目が見える者が注意しなければいけないことを話す	15.5%
・目が見えないためにぶつかってしまったのであり、わざとではなかったことを話す	13.4%
・視覚障害者には目が見える者が道を譲る必要があることを話す	11.3%
・白杖について話す	9.3%
・視覚障害者に謝るように促す	6.2%
・視覚障害者がいなくなってから障害について話す	6.2%
・その他	9.3%

NII-Electronic Library Service